

宗教倫理学会第18回学術大会
公開講演
2017年10月7日(土)
於 龍谷大学・大宮学舎

講 師

釈 徹宗 (相愛大学 教授)

演 題

宗教・社会・倫理の動的関係

レスポンス

小原克博 (同志社大学 教授)

司 会

井上善幸 (龍谷大学 教授)

宗教・社会・倫理の動的関係

積 徹宗 (相愛大学 教授)

ご丁寧なご紹介ありがとうございます。少しつかみどころのないようなお話におつきあいいただくこととなりますが、どうぞよろしく願いいたします。あとで小原先生と一緒に話をいたしますので、そこでうまく咀嚼していければと思います。今回の学術大会のテーマは「宗教倫理とは何か」と設定されております。それに関して、何か話をせよということかと存じます。このテーマで言いますと、善と悪、罪の問題、性や食、などの案件が思い浮かぶのですが、今回は「宗教・社会・倫理」が、どのような構図になっているのか、どんな動的な関係になっているのか、私はこういう図式で捉えております、といったお話ができればと思います。また、宗教倫理ならではの領域に、どういう論点があるのかについて、儀礼や異なる信仰の問題を取り上げてみます。さらには、宗教特有の存在論や時間論に基づいて、対称性を取り戻すなどといったお話につなげていければと考えております。

さて、宗教と社会と倫理の構図を考察する場合、大別しますと3つほど道筋があるかと思えます。一つは「宗教の領域から、社会に対しての働きかけ」といった関係です。ここに倫理という回路が設定できると思われまます。宗教は特有の規範や価値を社会に提供してまいりました。自己犠牲、献身、奉仕、利他行為といったものは、どの宗教も説くわけですから。いわば、宗教が社会に対して倫理的提案を行ってきた面があると言えるでしょう。また、宗教は、社会における倫理の根拠ともなってきました。たとえば、神を根拠として倫理が構築される、信仰を根拠として倫理が構築される、輪廻という生命観が倫理を構築される、といったことです。もちろん、宗教が求める倫理的態度と世俗社会の倫理が、ぴったり一致するわけではございません。なにしろ宗教は、性や食や睡眠といった生理的領域にまで価値判断を持ち込む、善悪という理念を持ち込むという特性をもっています。食べちゃいけないものがあつたり、性に関しても独特の禁止があつたりします。こういう面は、現代の倫理学からすれば、相い容れないところとなります。現代の倫理は、「他者危害の法則」に従いまして、他者に危害を加えない限り、最大限自由が尊重される、というのが主流です。各個人の自由意思が尊重されるわけですから。これは、宗教と倫理とのズレですね。

二つ目は、宗教と宗教の関係、「宗教間における倫理の問題」です。各宗教は、それぞれ善悪の理念や行為の規範を練り上げ、またそれを体系化し、教義・教学に位置づけてきたわけですから。このような各宗教内体系における倫理は、どの宗教も共有できるという部分もあれば、お互いに受け

入れ難い部分もあるわけです。各宗教特有の部分は、その宗教内に限定して機能するのであれば問題は少ないのですが、やはり互いに何とか折り合っていかなければ事態もあります。これも宗教倫理を考える上での論点のひとつでしょう。今日は、「宗教間対話」につきましても、少しだけお話をさせていただきます。また、実はつい先日、京都大学の「こころの未来研究センター」で国際シンポジウムがありまして、そこで「宗教間対話」についてお話をさせていただきました。いずれ文章になって発表されるかと思いますが、もしご興味がある方はそちらをお読みいただければと思います。

三つ目は、「社会から宗教へのアプローチ」というベクトルの関係です。社会が宗教に対して倫理を求めるといことがあります。社会は社会で、構築してきた倫理の部分をもっています。ヒューマニズムやフェミニズムなどは、脱宗教という方向性の中で育まれてきました。そして、社会はそれを宗教にも要請するわけです。いくら宗教的伝統であっても、非人間的な行為や、明らかに女性差別や子どもの虐待と考えられるものなどを、社会は認めるわけにはいきません。ここでおさえておかなければならないのは、そもそも宗教は社会とは別の価値体系をもっているという点です。社会の枠から、はみ出る部分が宗教にはあります。それが何といても宗教の大きな特性です。社会から見てもどれほど奇異であっても、愚かであっても、その宗教のコアに関わる部分は尊重されねばならないわけです。しかし、反社会的行為に関しては、社会は宗教に対して敢然と立ち向かわねばならない。宗教に対しても、社会は共存を求めます。ではこのような社会からの要請に対して宗教はどう応えるのか。自分を変えていくのか。それとも、コアの部分を持続させながら、変更可能なかところを変えていくのか。すなわち、どこがその宗教の本質にかかわる部分で、どこが枝葉末節なのかを、考えていかねばならない。この点に関してはアメリカの神学者のリンドベック(G・A Lindbeck)という人が面白い考察を述べています。彼は「宗教理念・教義にも、第一義的なものと、二次的、三次的なものがある」という考え方です。

以上、今回はこの三つの道筋を踏まえながら、「宗教・社会・倫理」のダイナミズムといいますが、お互いにせめぎ合って、お互いに譲りあったり、押したり引いたりする、そういう構図のイメージをお伝えしたいと思います。

[1] 倫理の発生

では、レジュメにあります「倫理の発生」というところをごらんください。倫理の起源につきましては、大別すると「超越主義的」な立場と「経験主義的」な立場の二つに分かれてきました。「超越主義的」な立場というのは「“神”や“人間を超える意思”といった超越的な理念をベースにして、倫理は発

生・構築されてきた」という立場です。もう一つは「経験主義的」な立場で、「倫理の発生は“神”などとは一切関係なく、人類の歩みの中で構築してきたもの」という立場ですね。後者の「経験主義的」立場では、ほとんどの意見が「理性や知性をベースにして倫理が構築されてきた」となります。でも近年、生物学とか動物行動学とか脳科学の研究の結果、「どうも倫理・道徳の起源は知性や理性ではなく、感情だ」という話が盛んになっています。面白いですね。これまで、感情というのは、理性や知性の対極にあると考えられてきたのですから。倫理のベースは何か。理性や知性だ。理性や知性の反対は何か。感情的な態度だ。そういうふうと考えてきたわけです。なにしろ、「感情」というのはとてもプリミティブな反応であって、これまでは「感情をコントロールするところこそ、理性や知性がある。そして、そこに倫理がある」と考えてきたのです。でも、今日の研究の結果、人類は内的な集団(自分たちのグループの集団)と、外的な集団との折衝において発生する「感情」によって「倫理」が発生したのではないかと考えられるようになってまいりました。つまり、感情が倫理的なものを生み出す、あるいは倫理的な感情を起こす、そういう取り組みができた集団が人類史の中で生き残ってきたと言えるわけです。倫理的な感情をうまく発達することができなかったグループは、次第に残ることが難しくなっていくんですね。結果的に、倫理的な感情を展開した我々「現生人類(ホモサピエンス)」のグループが残ってきたのではないかと。なにしろ他の種の人類はすべて絶滅してしまっているのです。

さて、その「感情」の中で最も重要な要素は何かというと、「共感」です。他にも「返報」(お返しをする)・「互惠」(互いに利益をもたらす)・「互酬」(お互いにやったりとったりする)なども、「感情」の領域ですね。つまり「あなたが楽しいことを、私も楽しいと感じる。あなたが苦しいことを、私も苦しいと感じる」という集団が「倫理」を構築し、残ってきたというのです。「共感」の際に分泌されるホルモン、たとえばオキシトシンなども重要な要素でしょう。また、人間が他の動物よりずいぶんたくさんもっている「ミラーニューロン」も注目すべきポイントです。ミラーニューロンとは、他者の痛みを同じように感じたりするニューロンです。1996年に発見されました。他者と自己を同一視するようなニューロンでして、集団内の価値の共有や、他の集団との交流に大きな役割を果たすことがわかりました。

これまでも倫理と感情とを結びつける考えがなかったわけではありません。18世紀のデビッド・ヒューム(David Hume)という哲学者は、早くから「倫理の発生は、知性や理性ではなくて感情だ」と主張しています。しかし、ごくごくマイナーな主張でして、主流はずっと「理性や知性を軸にして倫理を考える」というのが流れだったのです。それが行動科学や脳科学の発達で、もう一度「感情」の問題がリバイバルしてきて、「倫理」の研究に新しい風を吹かせているのです。

「知の巨人」と呼ばれるエドワード・ウィルソン(Edward Wilson)という生態学者が、こんな文章を

書いております。

「現在、少数の研究者がこうした根本的な探求に乗りだしている。彼らのほとんどは、倫理基準が生物学的要因と文化の相互作用を通して、進化によって生じたということに同意している。(中略) 道徳本能のそもそもの起源は、協同と背信の動的な関係である。」

(Wilson,E,O”*Consilience The Unity of Knowledge*”Alfred A Knopf,Inc.1998 エドワード・O・ウイルソン『知の挑戦』p.306 山下篤子訳 角川書店 2002 年)

「こういう状況で私たちは倫理規範の基礎を再検討しなければならず、また新たな問題を解決するうえで助けとなる一般理論を探し求めなければならなくなった。この努力はまさに緊急を要する。」(同上 p.362)

ここで言う少数の研究者とは、「感情」をもとに「倫理」を考えようとする人たちのことです。その人たちは「道徳、倫理の根本的な起源は協働、共感と裏切りの動的な関係だ」と考えています。あるいは、リチャード・アレクサンダー(Richard Alexander)という人も生物学的基礎から倫理を考えている人ですが、「直接互酬性」と「間接互酬性」といった考え方を提示しています。「直接互酬性」とは、直接やりとりができる相互メリットの関係ですよね。「間接互酬性」とは、大きなサイクルの中でまわり回って、結局、お互いのメリットがあると考えるものです。

こうして考えてみますと、我々の「感情の発達」と「倫理の指針」とのスピードが、うまくシンクロしていないように感じます。現代は短時間での社会的な変化が大きいので、なかなかうまく社会合意を形成することができません。そのうえ、現代人はどうも感情という反応の時間が委縮しているように思うのです。つまり、感情が短時間で表出される傾向が強くなっている。ウイルソンが「緊急を要する」などと警告しているように、各分野の研究結果をそれぞれ持ち寄り、互いに学び合いながら「倫理」を考え直さないと、かつて人類が歩んできたように「感情にあわせて倫理を構築する」というスピードではとても追いつかない。そう感じております。

身近な事例に照らし合わせて考えてみます。都市化が進むことによって「間接互酬性」の部分がどんどん増えてまいります。かつての小さな地域コミュニティを基礎単位とした社会、またそのコミュニティは何世代も同居しているような家庭を単位としている、そんな状況であれば「直接互酬性」が息づいていたのですが、現代社会ではそれは難しい。ですから、都市化につれて、「間接互酬性」の重要性が増します。それで、「間接互酬性」の関係領域が多くなると、実は“ただ乗り”の人が出てきます。自分は何一つ奉仕せずに、ひたすら恩恵を受けるような人です。そういう社会になると、重要になってくるのが、“他者の評価”なんですね。評価で人を裁く、ということになります。つまり、評判が悪い人は排除されていく。これが間接互酬性の性格が強い社会の状況です。近年の「厄介

な隣人」や「ちょっとした迷惑行為」が、ものすごくバッシングにさらされるのは、その前兆であると考えられます。

ところで、倫理感情や道徳感情の構成要素を社会心理学者のジョナサン・ハイト (Jonathan Haidt) が「モラル・ファンデーション」という概念で考察しているので、ご紹介します。我々の倫理的感情的な部分は、5つの要素で構成されているというのです。一つは「ケア」の部分。我々の感情がだんだんと進化・成熟していく過程で出てきたのが「弱者をケアしないとイケない」という応用問題・適用課題です。「弱者はケアすべし」という課題に、社会は適用していかなければいけない。そしてこのケアの対極が「危害」となります。

二つ目として、「公正」を挙げています。社会や共同体は「公正」に運営されていかねばならない。公正でないと感情が悪化します。公正の反対が「欺瞞」だとジョナサン・ハイトは言っております。三番目が「忠誠」。集団に対するコミットメントです。対極が「背信」です。こういう適応課題が人類に起こって、倫理が発達してきたんですね。

4番目が「権威」です。「伝統に対する態度」といってもよろしいかと思います。連綿と続いてきたものに対して、できるだけコミットするという感情ですね。

5番目が「神聖なものに対する敬意、畏れ」という適応課題です。ジョナサン・ハイトは「左翼の人は1番と2番に大きく依存し、右翼の人は3、4、5番に依存する」などと、面白い分析もしております。

ジョナサン・ハイトは「道徳は文明の発達を可能にしてきた。人類稀なる能力である。そして人類の営為の中で最も重要で最も争いの対象になる二つのトピックスは政治と宗教である」と述べています。「政治」と「宗教」という二つのトピックス。ですから、政治も含めて、社会の在り方と宗教とのお互いのせめぎ合い、そのインターフェイスの部分に「倫理」とか「道徳」というものの発生があり、その変容を見ていきたいわけです。

最近、しばしば「知性の劣化」ということが言われるようになりました。反知性主義なんて言葉も使われています。これに対して、社会学者の宮台真司さんが「今の状況は知性の劣化ではなく、感情の劣化だ」などと、面白いことを言っております。なるほどそうかも知れません。ただ、現代人の場合、「感情の劣化」というよりは、先程あった「共感とか返報の劣化」ではないかと思うのです。それはある種の“消費者体質”みたいなものが、この状況を生み出してきたような気がするのです。“代価を支払ったら等価のサービスを受けて当然”という態度には、「共感」や「返報」が入り込む余地は、あまりありません。我々は“賢い消費者”としての心と体を養ってきました。その結果、「感情が劣化する」へと至ったのではないのでしょうか。

先日、ある脳科学者の方にお話を聞いたのですが、携帯ショップなどでの一番の悩みはキレル

高齢者らしいです。高齢者が怒鳴ったり、怒ったりする事態に、どう対応するかでどこの店でも苦慮しているそうです。やっかいな高齢者が多い(笑)。あ、これは私が言っているのではないですよ、みなさん。その脳科学者がいっているのですからね。その人がいうには、「感情も老化するから起きているんじゃないか」と。「老化は、肉体とか記憶だけではなく、感情も老化する」というのはよくわかります。私も高齢者介護に関わっていますので、以前から同様のことを言及してきました。あのですね、知性とか理性はそんなに老化していくても、感情が老化している人っているんですよ。だから、キレている人は、理性的に怒っているつもりなのですね。「俺は怒る権利がある。だって俺は消費者じゃないか」という理屈なんです。そこには、「共感」「返報」という感情が、うまく働いてない。こういう事態もあるように思います。つまり、感情をもとに倫理を考え直してみると、これまで見えなかったものが見えるかも知れないわけです。

「互恵関係」や「共感」や「返報」というのは、人間以外の動物にも見ることができます。その理路から言えば、ある種の動物のコミュニティは倫理的な態度が見られるそうです。でも人間のように、家族と社会の両方を運営する動物はないそうです。我々は家族と社会との双方に所属し、どちらものメンバーとして運営していきます。それだけ高度な感情の働きが必要ですし、双方を円滑に運営するためのシステムやコードが必要です。そのために宗教が生まれた、とするのがニコラス・ウェイド(Nicholas Wade)という人の説です。

[2] 宗教と社会のせめぎ合い

2番の「宗教と社会のせめぎ合い」をごらんください。宗教と社会のインターフェイスの部分において、一体何が重要かについて考えてみようと思います。そこにニコラス・ウェイドの一文を引きました。

「歴史学者と政治学者は、宗教をたんに文化の一要素と見る傾向がある。けれども、宗教はそれよりはるかに大きい。」(Wade,N”*The Faith Instinct*”The Penguin Press.2009 ニコラス・ウェイド『宗教を生み出す本能』p.216 NTT 出版)

その通りだと思います。冒頭お話ししましたが、宗教は社会からはみ出す部分があります。だからこそ宗教です。つまり社会よりも領域が大きい、社会とは別の価値体系をもつわけです。宗教というのは人間の営みの中から生まれたものですが、人間を超える体系になる。宗教というのは、稼働し始めると、もう人間がコントロールできない。そういうところがございます。なにせ前世も来世も入ってくるのです。そんな社会では取り扱えない領域じゃないですか。ですから、それだけに強い。それだけに危ない。宗教は、自目的化して動く面があります。

その宗教の大きな柱となります「信仰」についてお話します。信仰とは何か。我々はこの世界を言語や理念で分節して認識をしております。分節するコード(解説する規則)として、民族や国家なんてのもありますし、信仰もあります。そして、それぞれにストーリー(体系)があります。我々の人生も、善も悪も、罪も救済も、一つのストーリーであり、ナラティブ(代替不能な物語り)ですよ。このナラティブに自己投機する営みが信仰だと言えます。そう考えますと、大事なことは、それぞれに体系化されているストーリーとストーリーとを、いかに架橋していくかという作業です。

連綿と続いてきた宗教体系のナラティブと出会って、「ああ、このストーリーは私のためにあった」ということになれば、もはや別のストーリーは必要なくなるわけです。それはもう単なるストーリーとは言えない。まぎれもなく「真実」です。そう表現するしかございません。そして、そこに身も心も委ねることができれば、人は間違いなく救われるわけです。何がしたいかという、宗教の特性として、ある体系を歩んでいる者にとっては絶対に譲れない領域があるということです。そこを曲げて折り合うことはできない。それがたとえ、別の体系を歩んでいる者にとっては何の価値もないようなものでも。それが宗教という営みです。ここに、「社会」と「宗教」、「宗教」と「宗教」が、互いに抱える困難さです。

こういう事情ですので、一般社会通念と照らし合わせて、いかに奇異や愚鈍に見えても、真摯な信仰、真摯な宗教的行為というのは尊重されねばなりません。繰り返しになりますが、宗教というのはそもそも社会から外れる領域をもっているのですから。社会から見て奇異なところは当然内包しているわけです。しかし、だからといってそのすべてを社会が許容することはできません。反社会的行為には立ち向かうことが必要になります。宗教と社会が、押したり引いたりせめぎあうことで、宗教体系は鍛練されていきます。一方、社会の方も、倫理や文化が成熟する。宗教は社会内におさまらない領域をもっておりますが、宗教は社会から離れて成立することはできません。また、宗教は社会と同化してしまうと、そもそも自分自身の存在意味をなくしてしまいます。ですから、常に社会とせめぎあいながら折り合っていく。宗教は社会との対話能力を高めるために、(宗教の)近接領域を学んでいくことが大事だと思いますね。自分自身の実感として、そう思います。それと、やはり宗教は社会問題と向きあわねばならないと思います。そうすることで、宗教は“社会というテーブル”に着席し続けるのです。そのような態度と取り組みこそが、宗教倫理を紡いでいく道だと考えております。

さて、それでは社会の側はどのような態度が重要なのか。社会は、フェアネス(公正性)を担保していかねばなりません。たとえば、欧米ではムスリムはマイノリティですけど、アラブではマジョリティです。アラブだと、クルド人とかコプト正教はマイノリティになるわけです。社会によって、ケアやサポートすべき対象は変わります。いずれにしても、あくなき社会的フェアネスの構築を目指さねばなり

ません。ですから、社会は宗教に対して、“丸テーブル”を用意する態度が大切です。どの宗教も着席可能な丸テーブルを用意する。特定の宗教しか着席できないというような社会であれば、「宗教倫理」は成熟していないと言わざるをえない。それが社会にとっての「宗教に関する倫理的態度」ということです。

そして、今お話ししました、宗教が社会から外れる領域を保持しつつ、社会から足を放さない、この姿勢にインターフェイス部分があります。宗教と社会との接触面です。時には、宗教が社会に倫理的な要請をすることも起こる。先ほど、生理的行為にも意味や価値を求めるところが宗教倫理の特徴だと言いましたが、実はそのような宗教の意味や価値が、社会の倫理を鍛練していく面もあります。なにせ宗教というのは大変破壊力があります。宗教がもつ、社会とは別の理屈や感性。たとえば、「貧しい者こそ幸いである」「飢えている者こそ幸いである」「悪人こそが救われる」などという(社会から見れば)逆説性あふれる思想は、宗教が社会に突きつける課題というようなものでして、それによって社会における倫理が鍛練されていく。

[3] 宗教倫理について

さて3番目、宗教倫理についてというところです。(1)「対称性」について取り上げました。宗教にしても、倫理にしても、特有の道筋で「対称性を取り戻す営み」ではないかと思えます。

今、宗教の逆説性についてお話ししました。社会とは全く逆の価値観を提示する。これは、社会がもっている非対称性を壊そうとする動きだとも言えます。これはまさに宗教ならではの破壊力ですよ。社会に別の価値をつきつける。社会をゆさぶる。社会の非対称性が揺れる。それは倫理を生み出すという原動力となりうるわけです。

社会は至るところで非対称性を生み出します。しかし宗教はそこに独自の理念で対称性を取り戻そうとするわけです。そういう図式をイメージしてみてください。そして、もちろん宗教が生み出す非対称性もあるんです。宗教は信じているものと信じていないものの境界をつくることは避けられないですから。そこには非対称性が生まれます。また宗教体系内の独特のヒエラルキーもあります。それで、倫理というのは、その宗教が生み出す非対称性を揺さぶる能力があります。倫理が宗教に対して「対称性を取り戻せ」と呼びかけてくるわけです。このあたり、宗教と倫理の関係というのは大変興味深いと思います。もう少し付言しますと、倫理の対称性の時間は短いのですが、宗教の対称性の時間はものすごく長いですよ。わかりやすくいえば、倫理というのは、社会の範囲で対称性を取り戻そうと動きますが、宗教はこの社会のみならず前世も来世も含めた長い時間の中で対称性を考えるというところがあります。ここの双方の動的均衡を見ていく、そこには「宗教倫理」という領域

ならではの問題があるはずで。

なぜこのような構図を考えついたのかといいますと、ここ数年かかわっている当事者研究の影響なんです。「当事者研究」をご存じの方はおられるでしょうか。北海道の浦河という小さな町にある「ベテルの家」というコミュニティで始まった活動です。ベテルの家は、もともと浦河にあったキリスト教の教会を拠点に産声をあげたのですが、現在は浦河町全体に広がっています。精神障害の人たちが暮らすコミュニティです。そこでみなさん、普通に暮らしています。会社を立ち上げたり、お勤めしたり、家庭をもったり。日本の精神医学のスタンダードからは、かなりはずれているらしいのですが、世界的にすごく注目されています。ですから、毎年すごい数の見学者たちが世界中から北海道の片田舎の浦河へ行く。世界の精神医学界では、ベテルの家はなかなかのトピックスだそうです。確かにユニークな取り組みをされています。そもそも治療をしようとしませんね。精神障害者として暮らすのです。たとえば、幻聴に苦しむ人がいると。それに対して、何とかその声を消そうと治療をしたり、薬を飲んだりせずに、「幻聴さん」などと名前をつけて、付き合うのです。時には、お互いにどれほどすごい幻聴を聞いたかを自慢し合ったりして。「すごい。そんなすごい幻聴、なかなかないよ！」なんて、みんなが敬意をもったりする。あるいは、「苦労を取り戻す」なんてことをやっています。精神疾患を抱えていると、家族は本人に何もさせなくなってしまう。普通の人々がやっているゴミ出しとか、後片付けとか、そういうものをさせない。つまり、普通の人々がやっている苦労を奪われてい

る。だから、「苦労を取り戻そう」なんて言って、普通の人間がやっているようなことを、その人なりの手法で引き受けていく。とにかく、次々と従来の常識に沿わない取り組みをやっているところなんです。石原孝二によりますと、「べてるの家は、昆布の販売などの「商売」や、幻覚・妄想大会、当事者による各地での講演活動など、精神科医療の常識を打ち破るユニークな活動を続けてきたが、型破りなそうした活動は、従来の精神科医療において奪われてきた当事者の「語り」や仲間・社会とのつながりを取り返し、「苦労をとりもどす」ための活動であったと言える。(中略)当事者研究において、この研究的な態度は、問題を「棚上げ」という機能をもっている。研究は問題を解決することを直接的な目的としない。」(「当事者研究の哲学的・思想的基盤」pp.52-53『臨床心理学』増刊9号 金剛出版2017年)となります。

そして、ベテルの取り組みでもっとも有名なのが「当事者研究」です。精神障害を抱える人が、時に、すごく具合が悪くなったり、ひどく怒ったり、状況に適応できなくなったりすることがある。それを

題材にして、「なぜこんなふうになったか」について自分自身を研究して、発表するんです。そして、その不具合について、みんなで討論し合う。そんなことをされています。この当事者研究の手法は、「認知行動療法」や「SST」(ソーシャル・スキル・トレーニング)と近接しているなどと専門家は高く評価しているのですが、でも私はちょっと違うと思いますね。当事者研究はそういったトレーニングじゃないと思います。明らかに「対称性」を取り戻そうとする営みだと思うのです。通常は、治療者と被治療者、ケアする人とケアされる人、そういう「非対称」の構図になりますよね。これを崩そうとするのが「当事者研究」の営みですね。実際に参加してみるとわかります。自分が抱えている問題をみんなの前にポンと出す。その問題について、本人も含め、いろんな人がいろんなことを言う。本人もそこにいる人たちも、みんなでその問題に向き合うんですよ。そこにある種の「対称性」が回復される。宗教がやろうとしていることもこの構図だな、と感じます。そんなわけで「ケアする側、ケアされる側」「サービスする側、サービスされる側」などといった構図を揺さぶってこそ「宗教倫理」。そんなふうに思います。だって、消費者体質にがっぷり四つに組んでこそ、「宗教倫理」ですよ。今や、医療や教育や福祉の領域にまで、消費者体質が蔓延しています。そこを見据えていきたいところです。とにかく、宗教の「対称性」の取り戻しの仕方、倫理の「対称性」の取り戻しの仕方、ここを考察することで、「宗教倫理」独特の道筋が見えてくると思います。

ところで宗教、倫理に特有なものとしての「儀礼」というものがあるかと思しますので、**(2)「儀礼と倫理」**についてお話します。宗教と倫理の関係は、理念や規範に目がいきがちですが、レヴィナスが指摘しているように「視線とか表情、身体、そこにこそリアルな倫理がある」という考え方に注目したい。もし、感情が倫理のベースだと考えるなら、当然、そうなりますよね。そこで宗教ならではの特性として「儀礼と倫理」というテーマがあるのではないかと思います。たとえば「通過儀礼」が生み出してきた倫理感覚・感性があります。ご存じのように人間は状態が変わる時には必ず「宗教儀礼」を営んできました。人類三大通過儀礼は結婚式、成人式、葬式ですね。子どもから大人のカテゴリーへ、生者から死者へのカテゴリーへ、移行する時には「儀礼」を営む。「儀礼」を営むことによって、その人のあり方そのものが変化し、権利が発生し、義務が発生するわけですね。そこに「自己抑制」「奉仕」「利他の感情」というものが心身に刻み込まれていく、「儀礼」を通して。そう考えると、今日の「感情の劣化」というのは「儀礼の劣化」とも関連しているのではないのでしょうか。儀礼が痩せていくことと関係があるのではないか。たとえば、「儀礼」には我々の中を流れる“内在の時間が延びる”という機能があります。

パウロ・ティリッヒ(Paul Tillich)が「時間」を「クロノス」と「カイロス」に分けたということをご存じの方も多いのではないかと思います。クロノスは「客観的時間」ですね。しかも近代に確立された量的

な時間がクロノスだとティリッヒはいうわけです。形式的な時間であり、物理的な時間です。それに対して、もう一つ「質的な時間」があると言います。もっと主体的な時間です。それをカイロスと呼びます(Tillich,P, *Systematic Theology*, volIII, Chicago,The University of Chicago Press, 1951,パウル・ティリッヒ『組織神学』第三巻 pp.369-370 佐藤敏夫訳 新教出版社 1984年)。

我々はさまざまなテクノロジーやサービスを発達させて、クロノスをずいぶん有効活用できるようになりました。かつてよりも移動時間はすごく短縮されました。ちょっとした日常の作業にとられる時間を、大幅に短縮することができました。じゃあ、昔よりもずいぶん現代人は時間が余っているかという、そんなふうになっていませんよね。むしろ現代の方がずっと忙しいし、イライラしている。どうしてでしょうか。それはカイロスが縮んでいるからです。クロノスをいくら余らせても、カイロスが萎縮すれば、忙しいと感じます。イライラします。その意味では、いかにカイロスを延ばすのかは、現代人の大きなテーマだと思いますかつて、カイロスを延ばす装置は、たくさんありました。でも、そういうものがどんどんなくなって、逆にカイロスを萎縮させる装置ばかりが増えているのが現代社会だと思います。長いカイロスの中で生きてると、ちょっとしたデコボコに対する耐性が上がるのです。ところが、縮んだカイロスの中で生きてると、ささいなデコボコも気になって仕方がない、イライラする、となってしまう。人類にとって、最もカイロスを延ばす装置は何かといえば、それは「宗教儀礼」です。「宗教儀礼」に身をおくことによって、カイロスは少しずつ延びます。これは、倫理観が心身に刻みつけられていくことと関係していると思います。

では、(3)「宗教間対話」についてお話しします。先ほど、宗教と社会との接触面(インターフェイス)のところに宗教倫理が発生するなど申しました。では、宗教と宗教、信仰と信仰のインターフェイスの方はどうでしょうか。ここには「宗教間対話」という問題が生じます。宗教間対話も、宗教倫理の大きなテーマとなります。もうあまり時間が残っていませんので、これについて一つご紹介します。「宗教間対話」というと、すぐに「理解」とか「共有」とかをベースに議論されがちです。しかし、そういうものを前提にしない方がいいのではないかという気がしています。というのは、お互いの共有点をベースにしようとする、やはり無理が生じて「神とダルマは同じだ」的なおかしい理屈に傾斜してしまうでしょう。時には、互いの信仰が毀損されるような場合もあり得ます。私はこれまでに、さまざまな宗教の方とお話してきましたが、「何も互いに理解とか共感のベースがなくても、敬意をもったり尊重したりすることは可能だ」と実感しました。次に上げた文章は内田樹先生の「結婚生活へのアドバイス」です。

「これから結婚生活を始めるお二人に私が申し上げたいのは、「結婚生活を愛情と理解の上

に構築してはならない」ということです。(中略)結婚生活にとって「愛情や理解」が不要であると申し上げているのではありません。もちろんそういうものがあれば、それに越したことはありません。でも、愛情や理解はその上に長く結婚生活を構築することができるような堅牢な基盤ではありません。(中略)それは、相手のことがよく理解できなくても気にしない、ということです。だいたい人間というのは自分が何を考えているのかだて、よくわかってはいないのです」(内田樹『困難な結婚』pp.206-207 アルテスパブリッシング 2016年)

なぜこのような文章を取り上げたのかというと、これまで宗教間対話を通じて、ここに述べられているようなことを実感したからです。何も共有基盤がなくても敬意をもつこともできるし、良好な関係を築くことができる、そう思います。

次の文章は中東地域研究者の内藤正典先生の「フランス社会はフランスにおけるムスリム社会を理解しあうことを諦めるべき」という提言です。

「つまり、お互いの原理は共約不可能であるということ。イスラームと世俗主義(公的空間に宗教は存在してはいけないという国家原則)って接点ないですね。どこまで行ったら絶対交わりっこない。ところがフランスは「啓蒙」で無理やり交わせようとする。それは無理だともう気付くべきだと思っているのですが、これをフランスの講演とかで言うと大変ですよ。非難の大合唱」(対談「イスラームは何とぶつかっているのか」『現代宗教 2016』p.15)

つまりお互いの原理は協約不可能であるということ。イスラームと世俗主義の接点はない。どこまでいっても絶対、交わらない。ところがフランスは啓蒙で無理やり交わせようとする。それは無理だと気づくべきだ、というお話です。これをフランスでいうと非難の大合唱になったそうです。

二人とも同じことをいっているように思います。理解を前提とせずとも対話はできる、共存もできる。そして、「儀礼」はその好例です。「儀礼」というのは理解とか共有基盤なくても、一緒に共感できたりします。信仰が異なっても、同じ場に身をおいたりするもできます。そこに参考としてあげましたが、機会があればぜひごらんください。モーガン・スパーロック(Morgan Spurlock)というドキュメンタリー映画監督がいます。面白い映画をつくる人です。この人はアメリカで「30デイズ」というテレビ番組を制作していました。30日間、視聴者参加で何かやってもらう。「30日間、刑務所生活を送ってもらう」とか、「同性愛者を嫌悪している人に、30日間、同性愛者のコミュニティで暮らしてもらう」とか、過激な

提案をして一般募集をするドキュメンタリー番組です。その中で「敬虔なクリスチャン男性がイスラムコミュニティに30日生活する」というのがあります。最初はお互いに遠慮しているのですが、だんだん打ち解けて仲良くなる。仲良くなったところで両者は激しく衝突するんです。次第に本音が出だすんですよね。このあたりがリアルです。食事をしながら言い合いになって、お互いに激昂して、一触即発という時に、たまたまお祈りの時間になるんです。奥さんが「あなた、お祈りの時間よ」と言います。でも、「ちょっと待ってくれ。ここは譲れないんだ」とダンナさんはおさまらないんですね。奥さんは、「何いっているのよ、お祈りでしょう」と促します。それで、「しょうがないな、先にお祈りをすませよう」となる。毎日のお祈りは、クリスチャンの男性も番組のルールで必ず参加しないといけないことになっています。だから、双方とも一緒にお祈りをするんです。それで、お祈りが終わった後、もう一度、食卓に着席すると、やはり先ほどとは空気が変わっているんですよね（笑）。

儀礼を通過することによって、衝突していたものがどこかズレる。一旦、棚上げになったわけです。これはすごく象徴的な場面だと思います。また、「儀礼」ならではの能力という感じがします。（参考：‘Morgan Spurlock 30 DAYS’ vol.2, Bluebush Production, 2006 「モーガン・スパーロックの30デイズ」クロックワークス）

また、同志社大学で、2012年に「アフガニスタンの和平と平和構築」という国際会議が行なわれて、なんとタリバーン代表とアフガニスタン政府代表が出席するという画期的な出来事がありました。でも、内藤正典先生によると、はじめから最後まで両者は一切、意見が一致しなかったそうです（笑）。終始、平行線。互いに意見は折り合うことがまったくできない。ぶつかっただけです。でもお祈りの時間がきたら、みんな一緒に祈るんだそうです。きちんと横並びに並んで儀礼に参加する。そういうのは「儀礼」がもつ対称復元能力ですね。儀礼の場に身をおくことによって「非対称」の関係が動くように思います。

さて4番目です。(4)「**信仰者と加害者意識**」を最後に付け加えたいと思います。この件は、宗教の領域での倫理にとって、大きな問題だと思います。宗教を「倫理」という文脈で考える場合、明確な信仰の自覚がある人は、自らの信仰がもつ「加害者性」というものと向き合わねばならないのではないかと思います。信仰はどうしても社会と折り合えない領域があります。信仰者は、その宗教のナラティブが自分の実存そのものになっている。それが他者に与える影響に、つつい無自覚になりがちです。すなわち信仰というのは他者を傷つける「加害者性」を内包している。そこを無自覚であってはいけないのではないかと。どのような信仰であっても、他の信仰をもつ人を傷つける可能性があるわけですから。信仰者は信仰が本来的に内包している「加害性」をもつことを自覚せねばなりま

せんし、この自覚なしに「宗教」と「社会」のせめぎあいは望ましいものにならないと思います。

以上、いろんな視点から「宗教・社会・倫理の動的関係」を見てまいりました。個別のテーマではなく、自分の考える道筋と構図をお話させていただきました。ポイントは「宗教の特性」というところでしょう。宗教というのは時間も存在も極限まで延伸していきます。だからこそ「社会」とぶつかる、だからこそ「倫理」も動く。「倫理」というのは生物学的に考えると「適応」という文脈で考察可能ではあるのですが、「宗教」というのは「適応」から外れてしまうところがあります。人間が不合理な行為へと走ってしまうのが宗教です。不合理な部分をもっています。でも「適応」を突き破って、その先まで心身を延ばすからこそ、「宗教倫理」特有の部分は起こるわけです。来世があるからこそ、この現世が相対化される。神がおられるからこそ、自分が相対化される。極限まで存在の時間を伸ばしていく宗教という独特の領域と、日常とがどのようにぶつかるのか。折り合うのか。日常とせめぎあって、問題を先送りしたり、棚上げしたりしながら、次の世代へとつなげていく。宗教の時間は長いのですから、性急に答えを出そうとしてはいけません。前世代も次世代も含めて見ていく。そういう態度に私は注目しております。それでは今日の講演はこのくらいにさせていただきます。最後まで御清聴ありがとうございました。